

～シリアル・ルネッサンス～

<http://www.riceisland.co.jp>

記録づくめの暑さに 虫対策報告 <今夏の平均気温>やはり暑かった 21地点で過去最高

今年の夏の平均気温が西日本では戦後2番目、東日本では3番目の高さだったことが、気象庁のまとめで分かりました。東京(39.5度)、甲府(40.4度)など8地点で、過去の最高気温。連続真夏日も、東京(40日)、鹿児島・(64日)など6地点で更新されました。平均気温は平年に比べ、北日本で1度、東日本で1.3度、西日本で1.2度、上回った。当然、虫にとって活動しやすい環境でした。

穀物につく虫ってどんな虫といえど?今回は代表的な2種類の害虫「ノシメダラメイガ」と「穀象虫」を解説します。

●ノシメダラメイガ

極めて広い食性を持ち水分の少ないものならば何でも食べ、そのうえ合成樹脂製の包装ぐらいなら簡単に食い破ります。したがって製品に入っていた場合、虫が入り込んだのが製造現場で虫が混入したのか、袋を食い破って流通現場で混入したのか、家庭内なのか、判断がつかないことがある困り者です。幼虫は4回脱皮し蛾となり、幼虫の生育期間は温度、栄養状況で差が出てきますが、生育条件が良ければ20日から一ヶ月くらいで、蛾が羽化するまでは一週間程を要します。発生には周期が見られ、年に3~5回発生するものと見られます。食品を食害するのは、幼虫の間だけです。発生の適温は25℃前後で、最適な条件では約40日で成虫になります。

●穀象虫(コクゾウムシ)

穀象虫は、甲虫の一種で、鼻面が象の鼻のように長く伸びています。穀象虫は、米粒の中に卵を生みます。数日で孵化(ふか)して幼虫は、お米の中を少しづつ食べながら大きくなります。やがて成虫となり米粒の中から出てきます。そして、お米を食い散らし、また卵を生みます。穀象虫は、玄米も好み卵を生みます。また、精穀工程の熱では死滅しません。25~30℃で産卵から成虫の出現まで約1ヶ月間かかります。害虫全般にいえることですが、虫は、気温が20℃を超えると発生しはじめ、25℃を超えると動きが活発になってきます。気温・湿度が上がってくるとお米も傷みやすくなり、匂いを発生しはじめます。人間には感じなくても害虫は、匂いにつられてやってくるのです。

アメリカでも「殺虫剤を多用すれば食害はもっと下げられるが、無害な自然物の混入を殺虫剤の混入に置き換えることは賢明ではない」とまで言っています。

R Iの扱うポストハーベストフリーの雑穀は、次のような虫対策を考えています。

パッケージ時の対策として、ガスの充填効率を高めるために窒素ガス発生機を導入。ガス充填工程の見直しと置換率のアップ行っています。今まで五種雑穀米スティックタイプはガス置換を行っていませんでしたが、包材をガスバリアのものに変更し、ガスの置換率をより高められる配管を施工しました。

製造ラインは虫を寄せ付けないよう、天然エキス100%の忌避剤を使用しております。従来はカプサイシン入りの包材を使用しておりましたが、メーカーの作業工程で目の痛みが発生しましたので中止いたしました。パッケージについては孵化抑制効果のある天然エキスを練り込んだ包材への切り替えを進めています。包材のメーカーでは、社内実験より8ヶ月の抑制効果があると結果が出ており、30kgの米袋には既に使用実績があるそうです。毎年虫のクレームが多く発生する9月、10月に向けて、化学的な薬剤を使用しない現状では100%防ぐことができません。虫の問題が発生しましたら迅速な対応と確実な対策で解決するような体制でお答えできるように務めております。